特別支援学校高等部第３学年　生活単元学習　学習指導案

目指せ！素敵な社会人（買い物・調理）

山形大学附属特別支援学校　　教諭　　阿部　友幸

１．単元の目標

・　自分の生活と環境との関わりや、環境に配慮した消費行動について理解するとともに、簡単な調理の仕方や手順について知り、自分で一人分の食事を作ることができる。　（知識・技能）

・　環境に配慮した生活やバランスの取れた食事について考え、物の選び方や使い方を工夫する。（思考・判断・表現）

・　環境問題について関心を持ち、消費期限や産地など食品の様々な情報に目を向け、問題の解決策について考えたり調べたりしようとする。　（主体的に学習に取り組む態度）

２．単元について

（１）教材観

本単元は、附属学校園の栄養教諭や地産地消の取組を進めている飲食店の方との出会いから、自分たちの生活や消費行動が環境につながっていることの実感と、価値観や行動の変革を促す学習である。

世界では年間１３億トンの食料が捨てられており、これは食料生産量の３分の１に当たる。日本でも年間６１２万トンの食料が捨てられており、食べられるのに捨てられてしまう「食品ロス」が問題となっており、本校でも給食で毎日食品ロスは発生している。また、日本は食料の６割以上を外国から輸入しており、食料を運ぶことで掛かる環境への負荷を示す「フード・マイレージ」が高く、地球温暖化などの気候変動の影響も問題である。

そういった問題の解決策の一つとして、「地産地消」がある。山形県は令和元年度におけるカロリーベースの都道府県別食料自給率が北海道、秋田県に次ぐ全国第３位で１４５％となっており、山形市は、地元で作られた農産物を積極的に利用して料理を提供している飲食店等を「地産地消の店」として認定する取組を行っている。また、スーパーでも食品ロスをなくすために賞味期限や消費期限が近い食品を値引いた特設コーナーを設けたり、ゴミを減らすために食品トレイ等のリサイクルを行ったりしている。

生徒が人との出会いから世界や身近な地域の問題とその解決に向けた取組について知ることで、自分も地球や地域のためにできることをしたいという気持ちになり、問題を自分事として捉えて自分の行動を見直すことができると考えられる。

（２）生徒観

本校は知的障がいのある児童生徒が学ぶ学校であり、高等部３年生は男子６名、女子１名の計７名が在籍している。自分でタブレット型端末等を活用して調べることができる生徒から、教師と一緒に写真やイラスト等を使ってやりとりする生徒まで、実態は様々である。

これまでの生活単元学習では、修学旅行で再発見した山形の魅力について、タブレット型端末を活用して「わたしたちの山形観光ガイド」を作成し、本校の教職員と児童生徒全員に配付した。この経験を通して、山形は伝統工芸や温泉だけでなく、食にも魅力があり、牛肉や果物をはじめとしたおいしい食べ物があると実感を伴って理解することができた。

調理学習については、１年生のときにおかずやデザート、２年生のときに弁当など、様々な調理を経験してきた。学習したことを実際に家庭生活で生かしている生徒は数名いるが、自分一人で食事を用意した経験がない生徒も多い。また、２年生のときには当時の栄養教諭とオンラインでつながり、弁当の調理を通して栄養バランスについても学習している。

買い物については、親と一緒に行く生徒がほとんどであり、自分でお金を払って買い物をする経験が少ない。食べ物を買うときに気を付けることについては、「（食べられるように）日付に気を付ける。」と期限に言及する生徒と、「小遣いで間に合うか値段を確認する。」、「電卓で計算をする。」と金額の計算に言及する生徒がいた。また、買い物の際にマイバッグを持参するという習慣はついているものの、その理由については「レジ袋がもらえないから。」と話しており、環境問題への意識があまりない様子が見られた。

（３）指導観

第一次では、学校卒業後の生活について触れつつ、「家族がいないとき、どうやってご飯を用意しますか。」と問い掛ける。一人で食事を用意した経験がない生徒が多いため、分からないと言ったり、今まで自分が家族と一緒に作ったことのある料理について話したりすることが予想される。その後、昨年度栄養教諭とオンラインでつながって学習した栄養バランスを振り返りながら、主食、主菜、副菜、汁物の分類ごとに冷凍食品やフリーズドライ食品をスーパーで購入し、調理して食べてみる。調理方法や味について感想や気付きを共有することで、一人でもおいしく調理できるという実感につながると考えている。

第二次では、栄養教諭の食育指導で、地球のゴミ問題や食品ロスについて学ぶ。身近な問題に触れながらクイズ形式で話をした後、「地球のために、私たちができることは何でしょうか。」と問い掛けることで、生徒が地球規模の問題を自分事として考えるきっかけになると考えている。そして、栄養教諭から地産地消の取組について聞き、県庁食堂を紹介してもらう。地産地消に取り組む飲食店に自ら連絡を取って食事の予約をし、実際に赴いて話を聞いたり地産地消の味を楽しんだりする経験を通して、地産地消の良さを実感したり、地球の問題解決に取り組む方の営みに憧れて自分たちができることについて考えてほしい。また、生徒の身近なことからゴミについて考えられるように、給食の残飯に着目できるようにし、毎日余った白米の量を計るようにする。

第三次では、県庁食堂で食べた食事の一品である「芋煮」を調理する活動を行う。地域の名物である芋煮を作る際には山形産の食材を使うため、買い物の際は「産地」に注目して食材を選ぶことができると考えられる。スーパーでは「なくそう！フードロス」などの特設コーナーに気付けるよう、事前に情報を伝えた上で買い物に行くようにする。また、スーパーの店頭にあるリサイクル・ステーションで、家庭から持参した食品トレイや牛乳パックをリサイクルする経験も行う。芋煮以外の主菜や副菜等については、第一次での学習を生かして自分で簡単調理できるものを選べるようにする。

単元のまとめでは、栄養教諭に自分たちが学んだことを報告する。その際、調査した白米の残飯の量も伝えるようにする。また、栄養教諭からの提案という形で、附属小学校と附属特別支援学校の家庭に配付される「給食献立表」の一部に、生徒たちが本単元で学んだ内容を掲載することとする。自分たちの学びを下の世代に伝えることで、持続可能な社会のための行動を広められると考えられる。

（４）ＥＳＤとの関連

・本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

相互性：一人一人の消費行動が身近な自然に影響を与え、これを無視して続けていれば地球環境に大きな負荷を掛ける。

責任性：私たち一人一人が環境全体を考えて消費行動を見直し、生活を変えていくことが大切である。

・本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力

クリティカル・シンキング：自分の都合だけでなく、環境に配慮した生活や消費行動をしているかを考える。

長期的思考力：私たちの生活が今後の地球環境にどう影響するか考える。

・本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

世代間の公正：自分たちも、将来の人も、豊かな地球環境で生活できるような消費生活を追求することが大切である。

自然環境や生態系保全を重視する：環境に配慮した消費生活でないと、環境に負荷を掛けてしまい、「より良い」消費行動とは言えない。

・達成が期待されるＳＤＧｓ

１２．つくる責任　つかう責任

３．単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①　自分が物を買う、食べる、捨てる行動が地球環境に影響していることが分かる。 ②　電子レンジや電気ケトルを使った調理の仕方や手順が分かり、一人で調理する。	①　地球環境への影響について考え、自分が工夫できることを自分の言葉で表現したり、消費期限や産地に気を付けて買い物したりする。	①　意欲を持って栄養教諭や県庁食堂社長の話を聞いている。 ②　食品やゴミの問題とその解決策について、意欲的に調べたり考えたりしている。

４．単元展開の概要（全４２時間）

次	●〇主な学習活動 ・生徒の反応	学習への支援 （・）	評価（△）
第一次	●自分でできる簡単調理をしてみよう。（９時間） 〇主食、主菜、副菜、汁物の分類ごとにグループを作り、簡単調理したいものを決める。 〇スーパーに買い物に行き、電子レンジと電気ケトルを使って簡単調理し、感想を伝え合う。 ・Ｗ（ワット）について初めて知った。 ・塊から豚汁になるのがすごかった。簡単でおいしかった。	・昨年度までの学習を振り返ることができるように写真を提示する。 	△ア②

	・袋のままチンしたら自然に開いて、歯ごたえの良いギョーザになったから驚いた。		
第二次	●食べ物やゴミの問題について考えよう。（６時間） ○栄養教諭から食の指導を受け、地球規模の食品ロスやゴミの問題について知る。また、リサイクルや地産地消などの取組について知り、地産地消を進める飲食店として県庁食堂について紹介を受ける。 ・ゴミがたくさんあって汚い。　・臭そう。（仕草） ・地球温暖化は聞いたことがあります。 **地球のために私たちができることは何でしょうか。** ・ペットボトルや空き缶をリサイクルしたい。 ・できるだけゴミは少なくしていきたい。とにかくこの先も今みたいな環境で生活したい。 ・祖母がやっているペットボトルリサイクルがよいことだと気付きました。手伝いがしたいです。 ・良い所が温暖化を止めることを祈っています。	・生徒が話の内容を理解しやすいように、栄養教諭と事前打合せを行い、言葉を精選したり、話の進め方（クイズ形式等）を相談したりする。 	△ア① △イ① △ウ①
	●地産地消の良さについて考えよう。（９時間） ○県庁食堂に電話し、食事の予約をする。県庁食堂で聞いてみたいことをまとめる。 ○校外学習で県庁食堂に行き、「夢つつみ弁当」を食べる。また、社長から話を聞いたり、質問したりする。 ・地産地消の弁当と芋煮がおいしかった。 ・生ごみもリサイクルしていると初めて知った。 ・形の悪い野菜も使っていると言っていた。 ・お客さんが自分でご飯の量を選べると言っていた。 ○給食の残飯（白米）の量を調べ始める。（以降、毎週月曜日、木曜日、金曜日） ・２ｋｇくらいあって多いと思った。 ・もったいないけど、私はおなかいっぱいでおかわりできない。	・考えや生き方に憧れが持てるように、県庁食堂社長の営みについても説明してもらう。 	△ア① △イ① △ウ①
第三次	●山形名物の芋煮をつくろう。（１２時間） ○芋煮の材料や作り方を調べてまとめる。 ○スーパーに行き、産地等の情報に気を付けながら食材を購入する。スーパーが地球環境のために行っている取組についても知り、家庭から持参した食品トレイ等をリサイクルしてみる。 ・山形産の牛肉は量が少なかったから、国産にした。外国産は量がいっぱいあったけど、家でも買わないからやめた。	・産地やスーパーの取組に気付けるように、注目するコーナー表示を事前に確認する。 ・リサイクルの良さを実感できるように、家庭で	△ア② △イ① △ウ②

	・初めて産地のチェックをして、改めて色んな所から届いていることが分かった。 ・あまりフードロスコーナーのものは買わないので（しめじを）買えて良かった。 ・初めてリサイクルしたけど簡単だった。 ○一人一人自分の分の芋煮を調理する。主菜や副菜は電子レンジで簡単調理をする。 ・里芋が山形産でおいしかったです。 ・鯖のみそ煮はとてもおいしくて、レンジで早くできて楽だった。 ・電子レンジで作るものも（自分で）できそうでした。	出たゴミを持参するよう保護者に協力を依頼する。 	
	●学んだことをみんなに伝えよう。（６時間） ○自分たちが学んだことをまとめ、栄養教諭に活動を評価してもらう。 <u>「学んだこと、考えたこと」として伝えたこと</u> ・ちょうどよい量を食べると、食べ物を残さないし、無駄にならないから、料理を作ってくれる人も喜ぶと思いました。 ・フードロスコーナーの食品は意外と多いことが分かりました。これから買い物するときは、自分が食べられるちょうどよい量の物を買いたい。 ・食品トレイもリサイクルできることは初めて知りました。 ○給食の残飯の量を栄養士に報告し、ご飯の量を調整できないか相談する。 ・ご飯を余らせてしまうことを、何だかもったいないなと心の中で思いました。今後二度とたくさんゴミを出さないよう、食べ物を残さず、嫌がらず、無駄にしないことを目指し、2030 年まで目標達成できるよう、（栄養教諭に）ご飯の余る量を減らしてほしいと願っています。 ○栄養教諭から「給食献立表」の一部に学習の成果を掲載することについて提案を受け、原稿を作成して提出する。	・持続可能な社会づくりの一員としての自覚が持てるように、栄養教諭から生徒の取組を評価してもらう。 	△イ① △ウ②

5．成果と課題

（１）成果

本実践では、買い物や調理の単元にＥＳＤの観点から人との出会いや経験を組み込んで学習を展開した。本実践における成果は３つある。

一つ目は、ＥＳＤの視点である責任性を働かせ、問題の解決策について自分の考えを持つことがで

きたことである。自分たちが毎日食べている給食でもゴミがたくさん出る事実を知り、自分たちで計量することを繰り返したことで、最初は「良い所が温暖化を止めることを祈っています。」（生徒本人の言葉）と他人事として問題を捉えていた生徒も、自分事として捉えて何とかしたいと考えられるようになり、栄養教諭に「ご飯を余らせてしまうことはもったいないなと心の中で思いました。ご飯の余る量を減らしてほしいと願っています。」と伝えることができた。これは、「給食は余って当然だ」という考えを環境への配慮という観点からクリティカル・シンキングを行い見つめ直すことができたとも捉えられる。

二つ目は、ＥＳＤの視点である相互性を働かせ、自分の生活と環境との関わりや、環境に配慮した消費行動について理解できたことである。本実践中に２回買い物をしたが、買い物で気を付けることとして初め「日付に気を付ける。」と書いていた生徒が、専門家から環境の話を聞いた後には「産地を見て買うように気を付ける。できるだけ食品ロスの食べ物を買う。」と書くようになり、環境に配慮して自分の消費行動を見直すことができていた。また、限られた予算で産地に気を付けながら芋煮の材料を買うことを通して、単に「県産を買えばよい」と覚えるのではなく、環境のことを意識しつつも「山形産は量が足りないから国産にする」といった現実的な判断ができたことも成果と言えるだろう。

三つ目は、生徒の学びを通して、保護者にとっても環境に配慮した生活について改めて考える契機になったことである。本校では毎日保護者と連絡帳を通して生徒の様子や連絡事項についてやりとりを行っている。本実践中、保護者から「リサイクルボックスに入れるのは初めてかと思います。学習後は家でも一緒に連れて行ってリサイクルしたいと思います。」、「我が家では食品トレイのリサイクルはしたことがなかったので、これを機に子供にも協力してもらい、分別をしてもらおうと思います。」といったコメントが書かれており、本実践が保護者も巻き込んで家庭での消費行動について見直すことにつながったと言える。

（２）課題

今回は地産地消やリサイクル、給食の残飯対策など、一つの単元内で幅広い内容を扱った。その結果一定の成果はあったものの、一つ一つの取組についてもっと時間を掛ければ、さらに掘り下げられたのではないかと考える。調理や買い物は毎年何らかの学習で取り上げられる活動であるため、今後はＥＳＤの観点からのカリキュラム・マネジメントを通して、より効果的に学習ができるよう学習計画を見直したい。

本単元を通した考察

【一連の流れの中で、核となる経験を通して自分の考えや感想を持ち、行動を変革する】

ＥＳＤの学習過程については、大西（2021）が「問題解決型の学習過程を基本としている。」としており、その学習過程を「①導入により子どもの関心・意欲が高まる→②学習課題をつくる→③仮説をつくる→④仮説を確かめるための調査・実験→⑤調査や実験の結果をまとめる→⑥結果にもとづく話し合い活動→⑦一応の解決と発信・行動化」としている。また、及川（2021）は、「ＥＳＤの取り組みは特に小中学校において『総合的な学習の時間』を中心に実践されることが多い。」としている。

しかし、知的障がいのある児童生徒や複数の種類の障がいを併せ有する児童生徒を対象とする場合、各教科等を合わせた指導という形態がある。本実践で行った生活単元学習については、学習指導要領解説に「生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的・体系的に経験することによって、自立や社会参加のために必要な事柄を実際的・総合的に学習するもの

である。」と記載されている。

本実践では、抽象的な思考が難しく、全般的に生活経験が少ない傾向がある知的障がいのある児童生徒を対象にＥＳＤの効果を強めるために、「一連の活動を組織的・体系的に経験する」学習過程を可能とする特別支援教育の良さと強みを生かし、上記の学習過程を以下のように変更した。

①導入により子どもの関心・意欲が高まる→②学習課題をつくる→③学習課題につながる一連の活動を経験する（本実践では地産地消メニューの飲食、残飯計量、リサイクル、買い物、調理）→④経験して分かったことや考えたことを伝え合い、まとめる→⑤一応の解決と発信・行動化

実践の成果は５（１）で述べた通りであるが、生徒の変容の要因として、残飯計量や買い物などを実際に授業の中で経験したことが挙げられる。ただ経験するのではなく、及川（2021）が述べる「探究的な学習ストーリー」の要素を加え、「子どもの疑問やニーズ、思考に寄り添った学習ストーリーを展開」したことが有効だったと考えられる。生徒の思考に沿いながら、栄養教諭や地産地消を進める飲食店の方など持続可能な社会の形成者である大人と出会うようにしたことで、生徒はその生き様に憧れて自分も同じように行動してみたいと思うことができていた。また、一連の流れの中で実際に残飯計量やリサイクル、買い物、調理などを経験することで、「…で～をした。」というエピソードが記憶に残りやすく、「～できた。」と達成感を得たり、「～と思った。」と自分なりの考えや感想をもったりすることができていた。このような授業での経験が核となり、学校外でも同じような状況で行動を変革することができるのではないだろうか。

以上のことから、知的障がいのある児童生徒を「持続可能な社会の創り手」として育てるためには、特別支援教育だからこそできる学習過程を生かしつつ、児童生徒が授業での核となる経験を通して自分の考えや感想を持てるようにすることが重要であると考える。

参考文献

奈良教育大学ＥＳＤ書籍編集委員会（2021）『学校教育におけるＳＤＧｓ・ＥＳＤの理論と実践』協同出版

文部科学省（2020）『特別支援学校学習指導要領解説　知的障害者教科等編（上）（高等部）』株式会社ジアース教育新社

高等部３年

山形大学附属特別支援学校　阿部友幸

現在の学年終了時に目指す姿

自分たちの住む地域に愛着を持ち、社会人の一人として地域や地球環境のために良いことをしたいと考えて行動することができる。

生活単元学習「修学旅行に行こう（山形県内）」

山形県内の食や伝統工芸、観光名所などから自分の興味のあるテーマを選択し、調べ学習をした上で様々な体験を行う。また、コロナ対策として飲食店やホテルが取り組んでいることについても気付く。学んだことは「山形観光ガイド」としてまとめることで学びを深め、外部にも発信する。

生活単元学習「目指せ！素敵な社会人（買い物・調理）」

〇主に養いたい ESD の資質・能力

クリティカルシンキング

自分の都合だけでなく、環境に配慮した生活や消費行動をしているかを考える。

長期的思考力

私たちの生活が、今後の地球環境にどう影響するか、商品購入後のことまで考える。

〇主に育てたい ESD の価値観

世代間の公正

自分たちも、将来の人も、豊かな地球環境で生活できるような消費生活を追求することが大切である。

自然環境や生態系保全を重視する

環境に配慮した消費生活でないと、環境に負荷を掛けてしまい、「より良い」消費行動とは言えない。

山形にも良いところがたくさんあるんだな。色んな人に広めたいな。

数学「お金を計算しよう」

※７名中４名のみ実施（学習状況別グループ学習のため）

買い物をするときのおつりの計算や、必要最低限の金銭を使った支払いについて学習する。実際の商品や紙幣、硬貨を使用し、実際の状況を想定して模擬練習をすることで、計算だけでなく支払いの技能も高める。

買い物の支払いに自信がついたぞ。自分で買い物したい。

ホームルーム「かっこいい大人になろう」

※キャリア形成と自己実現

学校卒業後の生活について考え、一社会人としてどんな仕事をするか、どんな生活を送りたいかなど、自分が大切にしたいことについて考える。卒業後に向けて学校生活で取り組んでいきたいことについて、個別面談も行いながら意識を高める。

かっこいい社会人になりたいな。そのためにどうしたらいいかな。